

# 清朝中期における旗人エリートの「旗人」意識と「中国化」

—松筠著『百二老人語録』・『西招図略』の検討を通じて—

村上 信 明

## 1. はじめに

筆者は前稿(村上2017)で、嘉慶4年(1799)における乾隆帝の死と嘉慶帝の親政開始が、清朝の帝国統治のあり方に質的变化をもたらした可能性を指摘した。すなわち「満洲のハン」・「儒教的な皇帝」・「菩薩王」という三種の君主像を体現する多面的な皇帝であろうとした乾隆帝が世を去り、父と違って何よりも「儒教的な皇帝」であろうとした嘉慶帝が実権を掌握したことにより、清朝は自ら「中華帝国」への変容を志向するようになったという見解を提示したのである。乾隆帝から嘉慶帝への政権交代期において、清朝の帝国統治の基調が、儒教的論理を基礎とする「中華」の秩序観・価値観を相対化し、これを「国語騎射」(満洲語と武芸)の奨励に象徴される「満洲」の伝統・価値観や、チベット仏教に代表される「藩部」の秩序観・価値観と(序列化したり、どれを中心・周縁と定めないという意味で)同列視するというものから、「中華」を自らの根本・核心と位置づけ、政策面でも「中華」の秩序観・価値観を優先するというものに変化したのではないか、というのが筆者の見方である。また前稿では、この変化を推し進める要因として、水面下で進行していた旗人の「中国化」があったという指摘も行った。本稿は、この旗人の「中国化」に関して、その具体像の一端を明らかにしようとするものである。

(2)

まずここで、筆者が用いる「中国化」という用語と、これと類義の用語である「漢化」の区別について説明する。清朝は、旗人が本来の美德である淳朴さを失い、国語騎射が廃れ、文弱・奢侈に流れることを「漢人の習気に染まる（染漢人習気）」と表現し、これを厳しく戒めていた<sup>1</sup>。一方で、漢人政権の明朝で官学とされた中国伝統の政治思想である儒教<sup>2</sup>については、旗人に対して学習を奨励し、皇帝自身もこれを積極的に学んだ。旗人には、四書<sup>3</sup>などの儒教の経書から出題される文科挙・翻訳科挙の試験を通じて任官・昇進をはたす道も開かれていた。このように清朝は、旗人が主体的に儒教の教養を身につけ、その秩序観・価値観を内面化し、官職に就いた際にその理念を体現する存在となるのは望ましいことだと考えており、これを「漢人の習気に染まる」と表現することはなかった。そこで筆者は、旗人による儒教の内面

---

1 旗人が「漢人の習気に染まる（染漢人習気）」（あるいは「漢習に染まる（染漢習）」）ことへの戒めは、清朝史料上から数多く見出せる。ここではその例の一部を示しておく。（下線は筆者による）

(1) 『清高宗実録』巻489、乾隆20年5月庚寅

満洲の本性は樸実であり、虚名につとめない。漢文に通曉したいというのなら、清語・技芸を学習する合間に少し心を留めておけばよいだけである。近日、満洲は漢習に染まっており、いつも文墨（詩文を作る、書画を書くなど）に秀でたいと思っている。また漢人と議論し、同年の行輩で往来するのは、ことに悪しき習慣である。（満洲本性樸実、不務虚名。即欲通曉漢文、不過於学習清語技芸之暇、略為留心而已。近日満洲薰染漢習、每思以文墨見長、並有与漢人較論同年行輩往来者、殊属惡習）

(2) 『清高宗実録』巻620、乾隆25年9月癸卯

今後、旗人は満洲の淳朴なる旧習を守ることにつとめ、騎射・清語を学ぶことにはげむように。漢人の習気に染まり、浮華（うわべは華やかだが実質の乏しいこと）に流れて根本を忘れてしまつては断じてならない。（嗣後旗人務守満洲淳朴旧習、勤学騎射清語。断不可薰染漢人習気、流入浮華、致忘根本）

2 「儒教」という言葉は、広義には孔子の教えをもとにした思想や学問の全般を指すが、清朝が孔子の教えの正統とし、また体制教学ともしたのは朱子学であった。本稿では「儒教」という言葉を多用するが、それはいずれも清朝が正統とした儒教、すなわち朱子学のことを指すものとする。

3 朱子学において儒教の枢要を説いた経書と位置づけられた『大学』・『中庸』・『論語』・『孟子』の4つの書物のこと。

化を「中国化」、旗人が「漢人の習気に染まる」ことを「漢化」と表現し、両者を区別するようにしている。

さて、話を本題に戻したい。本稿では、乾隆帝の晩年から嘉慶帝・道光帝の治世にかけて重要官職を歴任した松筠<sup>スヌン</sup><sup>4</sup>を例として、当該時期の旗人エリートが、「旗人」のあるべき姿をどのように認識していたのか、またそのことと自身の「中国化」との関係性をどのように考えていたのかを検討していく。松筠は、儒教を愛好し、漢文で多くの著作を残した当時の旗人を代表する知識人であると同時に、満洲語の著作『百二老人語録』において旗人としての誇りや自覚、また旗人が学ぶべき教訓を綴ったことでも知られる(村上2005: 69)(村上2007: 32)。すなわち彼は、相当程度に「中国化」が進むと同時に、「旗人」としても高い意識をもった人物であったといえる。さらに、松筠を論じるうえで等閑視できないのは、彼が満洲語・モンゴル語の能力が必要とされる理藩院の蒙古官員から身を立て、その後も藩部関連の重要官職を歴任するという、いわば藩部事務の専門家というべき特殊なキャリアを歩んだ人物であったことである(村上2004: 45)。清朝の藩部政策は、チベット仏教の論理に基づく交渉<sup>5</sup>や儀礼<sup>6</sup>が行われるなど、非中国的(非儒教的)論理によって進められた。その藩部政策に関して、藩部事務の専門家であると同時に「中国化」も進んでいた旗人官僚がどのような認識を持っていたのかを検討することは、清朝の「中華王朝」への変容という本稿の背景にある大きなテーマについて考える上でも価値のあることだと筆者は考える。

4 松筠は正藍旗蒙古の人で、姓を瑪拉特氏、字を湘浦(湘圃)といい、乾隆末年から道光前半にかけて軍機大臣・六部尚書・伊犁將軍等の要職を歴任した人物である。松筠の生い立ちや事績に関しては、先行研究を整理するとともに、松筠の昇進記録である『松文清公陞官録』に注釈を施した(馬・張2010)が、最新の研究として参考になる。

5 石濱(2001)・(2011)は、清朝がモンゴル・オイラト・チベットとの交渉において、チベット仏教の論理に基づく言説を用いたり、チベット仏教の王権思想を受容していたことを明らかにしている。

6 清朝・チベット間におけるチベット仏教の論理に基づく儀礼に関しては、村上(2011)、参照。

(4)

本稿では、上述のような特徴をもつ松筠が、満洲語の習得<sup>7</sup>に象徴される「旗人らしさ」の保持と旗人の「中国化」の関係についてどのように考えていたのか、また藩部政策に対してどのような認識をもっていたのかを、彼の満洲語の著作である『百二老人語録 (emu tanggū orin sakda i gisun sarkiyān)』と『西招図略 (dzang ni ba na nirugan baitai šošohon i bithe)』の分析を通じて明らかにし、乾隆朝末期～嘉慶朝における旗人の「中国化」を考察する際の一つの材料を提供したい。

なお、引用史料中の〔 〕は筆者が補ったもの、( ) は筆者による註記である。

## 2. 『百二老人語録』にみる松筠の「旗人」意識と「中国化」への認識

本章では、『百二老人語録』<sup>8</sup>の巻5・6の内容を検討し、そこから見えてくる松筠の「旗人」意識と「中国化」に対する認識を明らかにしていく。なお、『百二老人語録』巻5は①「師が教えるということ 10 節 (師教事十條)」、②「子・妻を教え訓じること 3 節 (妻子訓教事三條)」、③「家の生計につとめること 2 節 (家計事二條)」の計 15 節、同巻6は①「忠孝を論じた 6 節 (忠孝論六條)」、②「学ぶ、勤めることを論じた 9 節 (勤学論九條)」の計 15 節からなる。以下、煩瑣を避けるため、例えば巻5の①「師が教えるということ 10 節 (師教事十條)」の第2節を引用・参照する場合には「巻5-1-2」、巻6の②「学ぶ、勤

---

7 乾隆帝が「清語 (満洲語) は旗人の本来のつとめである (清語乃旗人本務)」(『清高宗実録』巻647, 乾隆26年10月辛卯)と述べているように、満洲語能力の有無は「旗人らしさ」をはかるうえでの象徴的な指標であった。

8 『百二老人語録』は、著者である松筠が老人から聞いた120の逸話という形式によって旗人に対する教訓を説いた書物である。筆者は旧稿 (村上2005: 69, 71-71) において、『百二老人語録』の概要や現存状況、関連の先行研究を紹介した。その後、『百二老人語録』の成立過程や各種版本の特徴、満文本と満漢合璧本の違い、記述内容の性質に関して、蔡 (2010) が第二章において総合的な研究を行った。『百二老人語録』について知りたい場合には、これらの論考を参照されたい。

めることを論じた9節(勤学論九條)」の第8節を引用・参照する場合には「巻6-2-8」等と略記する。

また、『百二老人語録』には大別して満洲語のみのテキスト(満文本)と満漢合璧のテキスト(満漢合璧本)の2系統が存在し、前者は松筠が著したオリジナルに近いもの、後者はこれに漢訳者の富俊<sup>9</sup>が改訂を加えつつ漢訳を付したものと見られる(村上2006: 104-106)(蔡2010: 31-49)。この両者の詳細な比較を行った蔡(2010: 46-47)は、満漢合璧本のほうが満文本よりも内容が精確で、論述も筋道が通っており、後年への流伝も多く、あるいは「漢化旗人」の思考様式により近づいているかもしれない、と指摘している。筆者もこれらの見解を妥当なものと考えている。そこで、旗人の「中国化」の問題を検討する本稿では、より「中国化」の影響を受け、読者数も多かったと思われる満漢合璧本(東洋文庫所蔵本)の満文部分を検討の対象としていく<sup>10</sup>。

#### (1) 旗人が満洲語で儒教を学ぶことの効用

『百二老人語録』巻5・6からまず読み取れるのは、旗人が「国語」である満洲語、もしくは満洲語と漢語の翻訳を学ぶことが、儒教の教えを身につけるうえでも有益である、という認識である。巻5-1-1には、八旗某旗の義学(旗人子弟の初等教育機関)の教習(教師)が、漢人の教習を招いて学生に漢文の書(nikan bithe)を学ばせるという話が出てくる。その箇所には、次のよ

9 富俊は正黄旗蒙古、卓特氏の人。はじめ理藩院筆帖式をつとめ、乾隆44年に翻訳進士となってから礼部主事に任用され、その後は礼部郎中、兵部右侍郎、科布多参贊大臣、理藩院尚書、内閣大学士などを歴任した(村上2002: 74)(村上2004: 3, 5)。富俊は松筠と同様、儒教についての深い教養をもつとともに満洲語・モンゴル語も習得し、理藩院の蒙古官員から身を立て、藩部関連の重要官職を歴任した人物であった。著作に『科布多事宜』・『蒙文指要』がある。

10 前述のように満漢合璧本が作られる際には、富俊による改訂が加えられているので、より正確を期すならば、本章で示す内容には富俊の認識も含まれるということになるが、煩瑣を避けるため、本稿ではすべて松筠の認識として取り扱う。

(6)

うな記載がある。

今、満漢合璧の註解のある四書<sup>11</sup>があるので、〔学生に〕一方で漢文の四書を読ませ、一方で満洲語に翻訳された註解のある四書を一緒に読ませ、理解するまで解釈させる。このため〔学生は〕漢文の書の意味をたやすく理解し、翻訳もまた自然とできる。

ここでは、漢文の四書を学ばせるだけでなく、満洲語に翻訳された註解つきの四書を一緒に学ばせることで、漢文の書（漢文の四書を指すと思われる）の意味をたやすく理解できるとしている。これと同様の認識は、巻5-1-3にも見られる。

周子（周敦頤）の『太極図説』・『通書』、張子（張載）の『西銘』・『正蒙』といった書の漢文の意味をたやすく理解することはできない。満文に翻訳されたものを見たときには、まったく解説がなくても理解できる。

周敦頤が著した『太極図説』・『通書』と、張載が著した『西銘』・『正蒙』は、いずれも朱子学で重んじられた書物である。ここでは、これらの書物は原文の漢文だけでは意味が理解しにくい、満文訳されたものを見れば容易にその意味がわかるとしている<sup>12</sup>。また巻5-1-5には、次のような記載もある。

某旗の官学で書を教える蒙古閑散バクシは、漢文の書をまったく学んだことがないけれども、『御製性理精義』に習熟していたので、性理の学（朱子学の一学説）を講究することは、漢文の書に通暁した人よりも適切である。

ここに登場する「蒙古閑散バクシ」は、八旗官学で書（古典）を教える教師がモデルとなっている。この人物は、漢文の書を学んだことがないと記され

---

11 「満漢合璧の註解のある四書」(manju nikan hergen i kamciha suhe hergen bisire duin bithe)とは、朱熹による四書の注釈書（四書集注）の満洲語訳を載せた乾隆20年（1755）刊『御製翻訳四書』（清高宗敕訳）の満漢合璧本を指していると思われる。

12 中国の古典の意味を理解しようとする際、原文の漢文よりも満文訳のほうが簡易で意味が分かりやすいとの考えは、清朝に仕えたイエズス会宣教師にも見られる（新居 2017: 203-204）。

ていることから、満文の『御製性理精義』<sup>13</sup>に習熟し、八旗官学でも満文訳（あるいは満文とモンゴル文の合璧）の古典を教えていたと考えてよい<sup>14</sup>。こうした旗人が実在したか否かは分からないが、少なくともこの記載からは、儒教を学ぶ際には漢文の書で学ぶよりも満文の書で学ぶほうが正しく意味を理解できるという認識が松筠にあったことがわかる。

## (2) 旗人が漢文の書を学ぶことに対する認識

しかし、松筠は旗人が漢文の書を学ぶことを否定しているわけではなかった。巻6-24には次のような記載がある。

われら旗人が、もし根本を忘れ、漢文の書〔を読むこと〕だけに励み、満洲語がまったくできないならば、まさに恥ずべきことである。あるいは、もし漢文の書を学ばないなら、どうやって身を修める、人を治める道を知ることができるのか、と疑問に思うかもしれない。〔これに答えて〕言うには、漢文の書を学ぶために、満洲語を失うのは誤りである。また、ただ満文の書〔を読むこと〕だけに励み、漢文の書を読む必要がないというのも誤りである。

このように松筠は、避けるべきは漢文の書だけを学んで満洲語の学習を怠ることであり、満洲語の書ばかりを読み、漢文の書を読む必要がないと考えるのも誤りであると認識していた。

旗人が漢文の書だけを学ぶことの問題点について、巻5-1-1には次のよう

---

13 『御製性理精義』は、康熙帝自身が儒教の性理の学について解説した書物で、大学士の李光地に編纂を命じ、漢文版は康熙52年、満文版は同56年に完成した。

14 『百二老人語録』巻5-1-4には、バクシ（満洲語で「学者」の意味）と呼ばれる蒙古助教（八旗蒙古官学の教師）が登場する。この人物は、官学生（八旗官学の学生）に「書を読ませ」、「モンゴル語に翻訳させ」、「釈文のある満蒙（満文とモンゴル文）の四書を読ませ」、「作論させ、満文に習熟させ」、「『御製性理精義』、また古文・綱目の「総要」を読ませており、官学生も満文の『御製性理精義』を学んだという（村上2006: 106-108）。ここでの蒙古閑散バクシが官学で教えていた「書」も、満蒙四書のような満文・モンゴル文に翻訳された中国古典であったと考えてよいだろう。

に記されている。

①幾人かの学生は漢文の書を少しばかり理解し、言葉をもてあそぶような振る舞いをしているので、満洲助教はただちに漢人の先生とともにその学生を指導し、「②汝は、四書を読むからには書のなかの要点を知るべきである。③妄りに書を読んで言葉をもてあそぶべきではない。その要旨とは、主人に忠実であるように、親孝行であるように、友を信頼するように、身を正すことを大切にするように、ということである。……④人は、書を読んで、まさにこれらの要点を自身で体験・実践し、すべて心で会得することができて、ようやく書を読んだといえる。もし⑤少しばかり書を読んで妄りに言葉をもてあそぶような振舞いをするならば、軽薄に流れるのは必定で、最後まで成就しないというだけでなく、しだいに自身が学んだことをすべて損なうことになってしまうかもしれない。なおかつ、⑥われらは聖主（皇帝）の恩により旗人となっており、国語騎射は非常に重要である。もしこれを棄てて漢文の書を読むことだけに励むなら、それはつまり根本を棄てて末節に励むことであり、必要などきになっても〔国語騎射が〕できないならば、国の恩に背くことになるではないか。⑦漢文の書を読むときには、必ず要旨によく通曉し、自ら体験して実践し、官に就いたのちにこの要点に基づいて人を教導することができるなら、まだ無駄なことではないだろう。もし⑧初めから言葉をもてあそぶような振る舞いをするなら、まったく益がなく、しかも聖賢の書を汚すことになってしまう」と言った。（下線は筆者によるもの）

下線部①・③・⑤・⑧から見て取れるように、ここで問題とされているのは、旗人子弟が四書等の漢文の書を少しばかり学んで理解したと思い込み、言葉をもてあそぶ（漢文では「舞文」）だけで、実際にはその教えの要点をわかっていない、という状態になることであった。このなかで満洲助教は、下線部②・④・⑦にあるように、旗人は四書の要点を把握し、教えの内容を自らが体験・実践し、任官した際にそれを活かして人々を教導すべきである、と述べてい



る。また下線部⑥には、「国語騎射」(満洲語と武芸)を棄てて漢文の書だけを学ぶことは「根本」を棄てて「末節」に励むことだと記されているが、全体の文脈からすれば、ここでの「根本」とは「国語(=満洲語)」で書かれた四書を学んでその要点を把握し、官に就いて国に尽くし、皇帝の恩に報いること<sup>15</sup>、「末節」とは漢文の四書だけを学んでその言葉をもてあそび、軽薄に流れて国の恩に背くことを指しているよう。

### (3) 旗人が満洲語を習得することの目的

『百二老人語録』巻5・6の全体に通底しているのは、満洲語が儒教の要点を理解するのに適した言語であり、旗人が満洲語を学ぶ目的もここにある、という認識である。巻6-25には、次のように記されている。

すべての学生は、満洲語の文章の氣勢<sup>16</sup>(勢いや風格)を学びたいというならば、語条の書を数多く読む必要はない。ただ満文の『御製性理精義』を読めば、満文の氣勢に通じるだけでなく、まことに天下の一切のこと、人と物が生じた道理をすべて理解することができる。

ここで松筠は、満洲語の勢いや風格を学ぶには「語条の書」(『一百條』などの満洲語教材を指すと考えられる<sup>17</sup>)を数多く読む必要はなく、ただ満文『御

---

15 なお『百二老人語録』の中には、「国語騎射」のうちの「騎射」に関する記述もあるが、管見の限りでは、「騎射」がいかなる意味において旗人の「根本」なのかという点について明確に論じた箇所は見当たらない。松筠の「騎射」観については、今後も検討を続けていきたい。

16 ここで「文章の氣勢」と訳出した箇所の原文(満洲語)は「ici」である。この語の本来の意味は「方向・目的・目標」であるが、この箇所の漢文訳は「文気」となっている。原文を直訳的に訳出するならば「満洲語の向かうべきところ」という意味になると思われるが、これだとわかりにくいので、本稿では「ici」を「文気」の意味として取り、「文章の氣勢(勢いや風格)」と訳出した。

17 『一百條』は、満洲語名を『tanggū meyen』という。tanggū は百、meyen は段落・条文の意味で、中国語で『一百條』・『清話百條』・『清字百條』などと訳される。本書は全100話からなる満洲語の会話書で、これを改編して満漢合璧としたのが『清文指要』である。『一百條』・『清文指要』の概要に関しては、竹越(2015: 16-17)、参照。

製性理精義』を読みさえすれば、満洲語の勢いや風格を学べるだけでなく、天下のことや人・物が生じた道理にも通暁することができる、と述べている<sup>18</sup>。松筠は、満洲語で書かれた儒教の経書や解説書を学び、その中で説かれる世界観や理想的な人格を身につけてこそ真の意味で満洲語を習得したことになると考えていた。そのことは、以下の巻5-2-1の記載からも見て取れる。

その（我が子の）満洲語を熟達したものにしたいというのなら、満洲語に翻訳された註解のある四書を読ませれば容易に満洲語に通暁することができ、しかも満文のほうもまた進歩する。いにしへの聖賢の道を理解して、後日聖主の恩により官に就いたときに身を修める、民を治める道を知り、最後まで主恩を辱めることがないようにできる。

ここでも松筠は、満洲語に習熟したいのであれば註解のある翻訳四書を読むべきで、そうすれば満洲語が進歩するだけでなく、いにしへの聖賢（堯・舜や孔子など）の道をも理解し、身を修め、民を治める道を知ることができる、との認識を示している。また、そのようにすれば最後まで主恩を辱めずにすむ、とも述べている。官に就いて国家に尽くすことこそが皇帝から恩を受ける旗人の目指すべきところであり、そのためには儒教の要点を理解し、これを体得・実践すべきである、そしてそのために必要なのが満洲語を習得し、満洲語によって四書や『御製性理精義』を学ぶことなのである、というのが松筠の考えであった。

以下に示す巻6-2-4からは、松筠の旗人観が見て取れる。

われら旗人は、生来賢くて悟性のある者が非常に多い。これはすべて国家の気運が盛んであり、教化が純正で、そのため「得天独厚（特によい天分に恵まれている）」というに等しい。旗人がまことに書を読んだときには、漢人の友らが書を読むときに比べて努力は半分でも効用は倍に

---

18 満文『御製性理精義』を読むことで満洲語の気質を学ぶことができるという認識は、巻6-2-4の「この（『御製性理精義』の）総目、計七節の読者は、まずこの七節を口に出して読み、心によって理解しきったら、自然と満洲語の文気（文章の気質）の根本が得られるので、……」という記載からも見て取れる。

なる。漢人の大臣に出会うごとに、また書を読む友たち、詩を読む人たちもみなこのように称揚することは、幸せでないといえるだろうか。しかし、このような天賦の賢い本性があるので、日を虚しく過ごし、おおよそ満洲語を話し、騎射を習得するだけで、功名を得ることにつとめる。書をまったく読まないため、道理を明らかにできない。

このなかで松筠は、旗人のなかには生来賢くて悟性のある者が多く、その理由として国家の気運が盛んであることのほかに、教化が純正であるため旗人が天賦の資質に恵まれたことを挙げている。ここでの「教化」とは、儒教により教え導かれたこと、すなわち旗人が「中国化」された状態のことを意味している。つまり、旗人は混じり気なく正しく「中国化」されたため、書を読むことの効用が漢人に比べて格段に高い、と述べているわけである。また後半では、満洲語と騎射をある程度身に着けても、書を読まないのでは道理を明らかにすることができない、と述べている。ここからも、満洲語の習得よりもむしろ儒教の説く道理への理解のほうが旗人にとって重要であるとする松筠の認識がはっきりと読み取れる。

以上の検討結果をまとめると、次のようになる。まず松筠の考えでは、旗人の「根本」とは、満洲語の習得それ自体ではなく、満洲語に翻訳された四書や『御製性理精義』等の学習を通じて儒教の要点を理解し、これを体得・実践することにあつた。松筠によれば、旗人は正しく「教化」が進んだために、生来的に漢人よりも儒教の要点を理解する点において優れた存在であり、そのことは漢文だけでなく満文によっても四書等を学ぶことでより強化されるものであつた。旗人が漢文だけを学び、満洲語能力を失ってしまうことに関して松筠が問題視したのは、漢文の書を学ぶだけでは四書等の内容を深く理解するのに不便で、しかも経書の言葉をもてあそぶなど軽薄に流れる傾向にあるという点であり、満洲語能力の有無それ自体ではなかつた。松筠にとっては、漢人以上に儒教の教えや価値観を内面化してそれを実践すること、すなわち高度に「中国化」が進んだ状態こそが旗人としてのあるべき姿であり、満洲語の習得はそのための道すじとして励まなければならないものであつ

た。松筠の認識では、旗人が「中国化」することと、「旗人らしさ」の象徴である満洲語の習得は、その間に矛盾がないどころか、むしろ相互に補完しあう関係のものだったのである。

### 3. 『西招図略』にみる松筠のチベット政策に対する認識

本章では、大阪大学外国図書館所蔵の松筠著『西招図略』満漢合璧本の内容を検討し、「中国化」した旗人官僚としての松筠のチベット政策に対する認識を考察していく。

松筠は、乾隆・嘉慶・道光朝を生きた旗人のなかでも突出して多くの著作を残した人物で<sup>19</sup>、『西招図略』もその一つである。同書は、松筠が駐藏大臣としてチベットに駐留している際に執筆したものと見られ、嘉慶3年中秋日の序がある。同書は28の項目から構成されており、駐藏大臣がチベットの政務に従事する際の心得や実務内容などが記されている。また、同書にはチベットの地図15幅（総図1幅・分図14幅）とその解説を記した『西招図説』一卷、及び「自成都府至後藏路程」・「前藏至西寧路程」という2幅の図とその解説が附されており、道光27年（1847）に重刻され、光緒19年（1893）には上海文瑞楼から石印で重刻刊行されている（宏2012: 61）。

『西招図略』は、松筠の漢文による著作として知られるが、実は大阪大学附属外国学図書館の渡部薫太郎コレクションのなかに同書の満漢合璧本が存在する。これは線装本で5冊からなり、第1～4冊が『西招図略』の本文、第5冊が『西招図説』一卷と「自成都府至後藏路程」・「前藏至西寧路程」となっている（ただし図はなし）。筆者が知るかぎり、『西招図略』満漢合璧本はこれ以外には発見されておらず、実に興味深い史料であるが、関連情報もまた皆無であり、本書がいつ、どのように作成されたのか、漢文と満文のどちらが先に作成されたのか、等の点は何も分かっていない。ただし、満漢合璧本

---

19 松筠の著作に関しては、宏（2012）が、先行研究を整理して概要をまとめている。

には道光27年に重刻された際の王師道による重刻序文が記されていないので、作成された時期はこれ以前であったと考えられる。

既述のとおり、本稿では松筠の「旗人」意識と「中国化」の関係性について検討している。そこで本章では、旗人の言語である満洲語による松筠の認識を知るため、『西招図略』満漢合璧本の満文部分<sup>20</sup>を訳出し、考察を進める。

#### (1) 『西招図略』の執筆理由とその背景

まず、序文の全訳を提示する。

考えるに、辺疆を守ることの要点は、①忠 (tondo)・信 (akdun)・誠 (uneggi)・敬 (ginggun)にある。忠・信・誠・敬であれば、また②〔物に〕通曉する、〔知を〕致す、誠をなす、正をなすことを、もとよりしなかったことはない。そのため、③物に通曉して理を窮める、④知に致して通俗を理解し、⑤意を誠にして欺かないことにつとめる、⑥心を正して欲を捨てるとき、忠・信・誠・敬はここから広がっていき、聖なる教えにつつしみしたが、寛容・仁愛によって教えを広めるので、あまねく近くの者、遠方の者はみな繋ぎとめられて教化に向かい、徳をおもう。ゆえにまた、徳を修めることを抛りどころとしている。しかしながら、徳を修めることは、小さな行いといっても必ずや慎み敬わなければならない。〔徳を〕修めることにつとめる者は、また必ずや〔問題が〕起こる前に防がなければならない。このため、事務の要綱として二十八の項目を記し、また土地の形勢を明らかにするよう図を描かせ、『西蔵の地・図に関する事務の要綱の書』（漢文名は『西招図略』）と名づけた。⑦これは特に、〔駐藏大臣が〕交代するときに便利なように、口述よりも詳

20 実際のところ、この満文部分が松筠の著したものという明確な証拠はない。後述する序文でも、満漢合璧本の漢文部分には松筠の名が書かれているが、満文部分には名が書かれていない。しかし、満文部分にも著者である松筠の考えが反映されていることに違いはないので、本稿では松筠が著述したものと仮定して論を進めていく。

細なものにしたいということである。後日、あるいは私が語り及んでいないところがあれば、これを補い記してくれることをまことに深く望んでいる。このために序を書いた。

嘉慶三年八月満〔月〕の日（十五日）（下線は筆者による）

まず前半では、儒教の用語が随所にちりばめられている。下線①は、『論語』衛霊公第十五の六「言忠信，行篤敬，雖蛮貊之邦行矣（言，忠信，行，篤敬なれば，蛮貊の邦と雖も行なわれん）」（下線は筆者による）にある「忠信」「篤敬」を満文訳したものである（漢文版では「忠信篤敬」となっている）。『論語』のこの一節は、言葉が信頼でき、行いが誠実で真心あるものならば、蛮貊（野蛮な人々）の国でも〔こちらが指示したことを〕行うだろう、という意味であり、ここでは松筠が清朝の辺疆の人々、具体的にはチベット人を「蛮貊」に重ね合わせて『論語』の言葉を用いたと見てよい。また下線②は「格致誠正」の満文訳、下線③・④・⑤・⑥はそれぞれ「格物」「致知」「誠意」「正心」の満文訳である。これらの言葉はすべて四書の一つである『大学』の「八条目」に列せられているもので、朱子学において重視された実践項目である。下線③の続きにある「理を窮める」とは、朱熹が説いた「窮理」のことである。このように『西招図略』序文には、儒教を信奉する松筠の考え方がはっきりとあらわれている。

次に、後半部分の下線⑦からは、『西招図略』の執筆が、駐藏大臣（清朝がチベットに派遣した現地駐留の大臣）が交代する際に、口述での引き継ぎだけでは詳しいことが伝えきれないので、今後の利便性を考えてチベット事務の要綱と解説を附した地図を書き残そうという動機により行われたものだったことが見て取れる。つまりこの著作は、今後駐藏大臣としてチベットに赴任してくる旗人官僚に読ませるためのものであった。

この序文は、一見すると儒教を信奉する旗人が書いた、さしたる特徴のない文章のように思えるが、当時の清朝とチベットの関係や松筠がチベットに派遣された事情、また松筠が前述のように理藩院官員からたたき上げた藩部事務の専門家であり、しかもチベット仏教の信奉者でもあった（村上 2005）

ことを踏まえると、多くの示唆的内容を含んでいることが見えてくる。

乾隆朝までの清朝とチベットの関係は、チベット仏教の論理に基づいたものであり、儒教的な華夷秩序に基づく関係性ではなかったとされている<sup>21</sup>。チベットに派遣された旗人官僚も、チベット仏教の大施主たる皇帝の代理として、ダライラマ・パンチェンラマと会見する際にはチベット仏教の習慣にしたがって叩頭礼を行い、カターを献じていた(村上2011: 48-61)。このことを踏まえると、松筠が『西招図略』において儒教的論理に基づいて持論を展開していることに違和感を覚えざるを得ない。しかも松筠は、藩部事務の専門家にしてチベット仏教の信奉者でもあり、清朝とチベットの関係がチベット仏教の論理に基づくものであったことを深く知りうる立場にあったはずである。しかし彼は、今後駐藏大臣として赴任してくる旗人官僚に伝えるためとして、敢えて儒教的論理を前面に出した著作を残したのであった。

この背景には、松筠がチベットに派遣された時期における清朝・チベット関係の変化があったと考えられる。乾隆56年(1791)から59年にかけて、清朝はそれまでチベット側の習慣に合わせてきたダライラマとの会見儀礼に修正を加えようとし、チベット側も清朝側の儀礼に合わせるような動きを見せた(村上2017: 84-85)。その結果、駐藏大臣によるダライラマ・パンチェンラマへの叩頭礼は行われなくなり、ダライラマは高座から降りて立ち姿勢で<sup>22</sup>駐藏大臣を迎え、ダライラマ・パンチェンラマ及びその補佐役のデモホトクト・ジルンホトクトを除く一般の転世僧(ホトクト)とカロン<sup>23</sup>は跪

21 このことに関して、鈴木(1962: 30-35)は、清朝皇帝がチベットでは「文殊菩薩の化身」と見なされており、清朝皇帝とダライラマが「施主」と「応供僧」という仏教的な対等の関係にあったと述べている。また石濱(2001: 353-355)は、17～18世紀には清朝がチベット・モンゴルとチベット仏教の世界観・王権思想を共有し、チベット仏教の論理に基づく「チベット仏教世界」を形成していたと論じている。

22 これ以前は、ダライラマは高座に坐ったまま駐藏大臣を迎えていた(村上2012: 63)。

23 カロン(噶布倫)は、当時チベット政府において政務を取り仕切っていた4人(俗官3人、僧官1人)の大臣のこと。

いて駐藏大臣に接するようになった(村上 2011: 61-67)。これにより、清朝・チベット関係におけるチベット仏教の論理の比重が低下し、一方で清朝側の礼秩序の影響力は高まった。このようなタイミングで、松筠はチベットに派遣されたわけである。松筠はチベットに赴任するにあたり、乾隆帝から「自らを礼節ある者とすることは、松筠が必ず願うところ」と指摘され、前任者の和琳と同じくダライラマに叩頭を行わず、一般の転世僧やカロンと会う際には彼らを跪かせるようにという指示を受けたが(村上 2011: 65)、それに対して松筠は、

旨で訓じているように、自らを礼節ある者とすることは、奴才松筠が非常に願うところです。その上、主の恩こそが奴才の福であります。少しもダライラマに求めるところはありません。<sup>24</sup>

と述べ、和琳と同様にダライラマに叩頭せず、他の転世僧・カロン等に会う礼もすべて和琳のとおりに行いたいと返答している(村上 2011: 66-67)。前述の乾隆帝の諭旨及びこの史料中の「礼節ある者」の原文(満洲語)は「derengge」で、「体面(のある者)」とも訳せるが、ここでの「礼節(体面)」とは、具体的にはチベット側の習慣にしたがわず、ダライラマと会う際には「賓主の礼(賓客と主人との間の対等な礼)」により接し(村上 2011: 64)、一般の転世僧・カロンとは君臣の礼により接することを指している。この措置は、従来どおりダライラマの宗教的権威を尊重しながらも、彼のもとで政務を掌るカロン等については駐藏大臣の統制を受ける立場にあることを明確にするためのものであった。ダライラマを崇敬するチベット仏教信奉者でありながら、礼を重んじる儒教の教えを政治信条としていた松筠は、このとき駐藏大臣としてチベットに派遣するのにまさに適任の人物であったといえる。そして、このようなかたちでチベットに派遣されたからこそ、松筠はチベットにおいてその政治信条を表に出すことができたのだろう。

しかし、これだけでは松筠が敢えて『西招図略』を執筆し、儒教的論理に

24 「軍機処満文録副奏摺」3486-29(マイクロフィルム番号 159-1207)、乾隆 59 年 11 月 13 日、松筠奏。



基づく自らのチベットの政務に関する見解を後任者に伝えようとした理由までは説明できない。彼をこのような行動に突き動かしていたのは、『百二老人語録』を著したことからもうかがえるように、当時の旗人の状況に対する問題意識と、旗人官僚のあるべき姿への思い入れの強さであったと筆者は考える。歴史的事象の原因を安易に個人の性格に求めるべきではないかもしれないが、やはり松筠の活発な著述活動に関しては、彼の問題意識の高さ、思い入れの強さがあってものだったと考えざるを得ない。

## (2) 『西招図略』に貫かれる儒教的論理

続いて、『西招図略』の第2項「藩を撫すること（撫藩）」を見てみたい。その冒頭には、次のようにある。

藩の者たちを撫するには、〔彼らを〕監督し、安寧になるよう教え導く必要がある。たとえば衛蔵（中央チベット）のダライラマ・パンチェンエルデニも、また藩の人であるぞ。その性はただ〔仏教の〕経典を読誦し、教えを教示することを知るだけである。その属下の衆民をいかに撫養するのかということをもとよりまったく理解していない。ゆえに、聖主が大臣らを特派して蔵（中央チベット）の地に駐留させ、〔彼らに対して属下の民を〕教導させ、撫養させたことは、とくに辺疆を安寧となし、藩の者たちを撫するように、ということであったのだぞ。

ここで松筠は、ダライラマ・パンチェンラマ（パンチェンエルデニ）を「藩」の人であるとし、駐蔵大臣の役割は彼らが属下の民を教導・撫養できるように監督し、教え導くことであると述べている。「藩」の原語（満洲語）は「aiman」である。aimanは、本来は部族・部落という意味で、モンゴルの部族を中心的存在とする「外藩」（満洲語でtulergi aiman）の「藩」をも意味し、さらには華夷の「夷」の満洲語訳としても使用される。すなわち松筠は、ダライラマ・パンチェンラマは外藩王公あるいは番夷の首長と同列の存在であり、駐蔵大臣は彼らを監督し、教え導く立場にある、という認識を示したのである。ここで松筠が駐蔵大臣に求めているのは、儒教の論理に基づいて夷狄を

教化すべきとされた儒家官僚のようなはたらきであり、その考えを後世に伝えるために『西招図略』を著したのであった。

また、前掲部分のあとには、次のような記載がある。

彼（ダライラマ）の属下のカロン・僧俗・営官ら・ディバ・頭人らは、あるいは搾取することがあって衆民が離散して逃げたことがあっても知らないでいる。もし彼が知らないことに対してすぐに叱責するのなら、それは撫する道ではないであろう。これゆえ、①必ずや聖なる〔皇帝の〕仁を広げるように〔カロンらに〕伝え、内地諸省の百姓の民を普段どのように教導・撫養したか、些細な災いに遇ったときにどのように賑救したかを理解させ、つづいて営官らを厳しく管理すること、衆民を安んじ養うことを教え、②およそ災害のときには賑救に関する一切の論告文に、すべては聖主（皇帝）の驚嘆すべき恩、またダライラマ・パンチェンエルデニの慈悲であると書きあらわさせ、衆民をみなその恩徳に感激させるなら、彼らは喜び、私たちが統治することにしたがい、掣肘しなくなる。  
(下線は筆者による)

ここで松筠は、駐藏大臣のなすべきこととして、ダライラマのもとでチベット政府の政務を掌るカロンらに「内地諸省」における民の教導・撫養や災害時の賑救のあり方を理解させることを挙げている（下線①）。このように松筠は、駐藏大臣は儒教的な徳治の論理によってチベット政府高官をより善き方向へと教え導くべき存在であると認識していたのである。また下線②の箇所では、カロンらがチベットの衆民を治める際には、当地におけるダライラマ・パンチェンラマの宗教的権威を尊重し、論告文において彼らを清朝皇帝と同列の存在と位置づけさせるようにするのがよいと述べているが、これも本項「藩を撫すること」の最後の部分に、

たとえラマらの富と強勢さが衆民より秀でていても、衆民はただラマを敬い信じている。そのため〔彼らが〕安寧となるよう管理し、巧みに撫して巧みに教導すべきである。「その人の道を以て、すなわちその人の身を治める」(朱熹『中庸章句』第十三章の一節の引用)といったことは、

これであるぞ。(下線は筆者による)

とあるように、松筠にとっては朱熹『中庸章句』第十三章で説かれる「その人の道を以て、還ってその人の身を治める(以其人之道、還治其人之身)」との言葉、すなわち儒教的論理の実践であった。さらに『西招図略』漢文版における上掲史料の下線部分は「羈縻」となっており、ここからも松筠がダライラマ等の宗教的権威の尊重を中国伝統の羈縻支配の一例であると位置づけていたことが分かる。

以上のように、松筠は『西招図略』において儒教的論理を前面に出しながら、今後駐藏大臣となる旗人官僚に向けてチベットの政務に従事する際の心得や実務内容などを説いた。既述のように、彼個人はチベット仏教を信奉していたが、『西招図略』を含む彼の著作からは、政治的文脈においてチベット仏教の論理、すなわち石濱(2001: 211-217)の述べる「仏教政治(ダライラマの教えに基づく政治)」の論理を受容・内面化していた形跡は見出せない。彼の政治的な発想や信条は、あくまで儒教をベースとしたものだったと考えてよいだろう。ただし、それは儒教の礼制をチベット側に受け容れさせようとするようなものではなかった。松筠は、チベットのの人々にとっての「道」であるチベット仏教の論理によってチベットを治めるべきであり、それこそが朱熹の教え、すなわち儒教的論理にかなっていると認識していたのであった。

#### 4. おわりに

本稿では、「中国化」が進んだ旗人エリートである松筠が、(1)「旗人らしさ」の象徴である満洲語の習得と旗人の「中国化」との関係、(2)清朝のチベット政策のあり方、に関して、どのような認識を持っていたのかを検討した。その結果をまとめると、次のようになる。

まず(1)に関して、松筠は、旗人にとって最も大切なのは満洲語の習得それ自体ではなく、満洲語に翻訳された儒教の経書などの学習を通じて儒教

の要点を理解し、これを体得・実践することにあると認識していた。松筠によれば、旗人は正しく「教化」（中国化）されたために儒教の要点を理解する点において生来的に漢人よりも優れており、そのことは満洲語によって四書等の儒教経書を学ぶことでより強化されるものであった。松筠にとっては、漢人以上に儒教の教えや価値観を内面化してそれを実践すること、すなわち高度に「中国化」が進んだ状態こそが旗人としてのあるべき姿であり、満洲語の習得はそのための道すじとして励まなければならないものであった。松筠の認識では、旗人が「中国化」することと「旗人らしさ」の象徴である満洲語の習得は、その間に矛盾がないどころか、むしろ相互に補完しあう関係のものであった。

(2) に関しては、松筠自身はチベット仏教を信奉していたものの、その政治的な発想や信条はあくまで儒教を基礎としており、政治的文脈においてチベット仏教の論理を受容・内面化していたわけではなかったと考えられる。松筠は、ダライラマ等の宗教的権威を尊重するなど、チベット側の価値観に合わせて政務を執るべきとしたが、これも儒教的論理の実践であり、羈縻支配の一例であると認識していたのであった。

以上のように、松筠は、旗人が満洲語を学ぶべきであるのも、また藩部政策において藩部側の論理に合わせて政務を執るべきであるのも、旗人が儒教における理想的な人間像を体現し、官に就いて儒教的徳治を具現化することにその目的があると考えていた。ここで改めて強調しておきたいのは、松筠が、いわゆる「満洲人の漢化」の議論でしばしば語られるような、「国語騎射」ができなくなり「旗人らしさ」を失ってしまった旗人ではなく、むしろそのことに抵抗して満洲語で『百二老人語録』を執筆し、旗人としての矜持を示した人物であったこと<sup>25</sup>、また当時の清朝における藩部事務の専門家の一人、すなわち満洲語とモンゴル語の翻訳ができ、藩部に対する清朝の非中国的（非儒教的）な支配の理念や手法についても理解が深かった人物であり、しかもチ

25 このため『百二老人語録』に関する先行研究では、松筠は典型的な「満洲人」と評価されてきた（村上 2005: 69）。

ベツト仏教の信奉者でもあったということである。いわば彼は、当時の旗人社会において、人並み以上に非中国的要素を持ち合わせ、清朝の帝国統治の非中国的側面を理解していた人物であった。こうした特徴をもつ松筠が、儒教的論理を深く内面化し、その論理に基づいて満洲語習得の目的や藩部政策のあり方を論じていたこと、及びその具体的内容を明らかにした点に、本稿の意義があると筆者は考える。

本稿で論じてきたような松筠の認識が、当時の旗人社会において標準的なものであったかどうかについては、現時点では確かなことは言えない。ただし、『嘯亭雜録』のなかで松筠の儒教的素養を称賛した昭槎<sup>26</sup>や、『百二老人語録』の内容に感銘を受けてこれに漢訳を付した翻訳進士の富俊のように、当時の旗人社会を代表する知識人のなかには、松筠の考えに共感を示す者も少なからず存在した。今後は、松筠及び彼に近い考えをもつ旗人が、乾隆帝から嘉慶帝への政権交代期においてどのような動きを見せたのか、またその動きが清朝の帝国統治のあり方にどのような影響を及ぼしたのかについて、さらに考察を進めていきたい。

## 史料

『百二老人語録 (emu tanggū orin sakda i gisun sarkiyān)』, 松筠撰, 東洋文庫所蔵.

『西招図略』(満漢合璧本), 松筠撰, 大阪大学附属外国学図書館所蔵.

『清高宗実録』(『大清高宗純皇帝実録』), 慶桂等纂修 → 華文書局, 1964年

「軍機処満文録副奏摺」, 中国第一歴史檔案館所蔵マイクルフイルム.

『嘯亭雜録』, 昭槎撰 → 中華書局, 1997年.

26 昭槎は太祖ヌルハチの次子代善ダイシヤンの六世孫にあたり、19世紀初頭に礼親王の爵位を承襲した人物。昭槎の著作『嘯亭雜録』巻4、松相公好理学条には、松筠が幼少の頃から儒教(宋儒)の書に親しんでいたことが記されている。また『嘯亭雜録』巻10、満洲二理学之士条でも、旗人を代表する二人の儒学者の一人として松筠の名を挙げ、その学識を称賛している。

『国朝耨猷類初編』, 李桓輯録 → 文海出版社, 1966 年.

#### 参考文献

##### 日文 (アイウエオ順)

- 石濱裕美子 2001 『チベット仏教世界の歴史的研究』 東方書店.
- 石濱裕美子 2011 『清朝とチベット仏教——菩薩王となった乾隆帝——』 早稲田大学出版部.
- 鈴木中正 1962 『チベットをめぐる中印関係史——十八世紀中頃から十九世紀中頃まで——』 一橋書房.
- 竹越孝 2015 「『一百條』・『清文指要』 対照テキスト (1)」 『KOTONOHA』 第 149 号, 16-40 頁.
- 新居洋子 2017 『イエズス会士と普遍の帝国——在華宣教師による文明の翻訳——』 名古屋大学出版会.
- 村上信明 2002 「乾隆朝の繙訳科挙と蒙古旗人官僚の台頭」 『社会文化史学』 第 43 号, 63-80 頁.
- 村上信明 2004 「乾隆 40 年代後半以降の藩部統治を担当した蒙古旗人官僚」 『史峯』 第 10 号, 1-18 頁.
- 村上信明 2005 「清朝中期における蒙古旗人の自己認識——正藍旗蒙古旗人松筠の例を中心に——」 『内陸アジア史研究』 第 20 号, 67-82 頁.
- 村上信明 2006 「松筠著『百二老人語録』 鈔本 4 種のテキスト比較」 科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 「清朝における満・蒙・漢の政治統合と文化変容」 研究成果報告書 (研究代表者: 楠木賢道), 91-111 頁.
- 村上信明 2007 『清朝の蒙古旗人——その実像と帝国統治における役割——』 風響社.
- 村上信明 2011 「駐藏大臣の「瞻礼」問題にみる 18 世紀後半の清朝・チベット関係」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 第 81 号, 45-69 頁.
- 村上信明 2017 「乾隆帝の時代の終わり」と清朝の変容——清朝・チベット関係を中心に——」 『史境』 第 73 号, 82-103 頁.

##### 中文 (ピンイン順)

- 蔡名哲 2010 「本計是図, 審所先務——《百二老人語録》中の認同与記憶」 国立中正大学歴史学研究所碩士論文.
- 宏偉 2012 「清代八旗蒙古文人松筠及其漢文著述」 『蒙古学集刊』 2102 年第 4 期, 54-66 頁.
- 馬長泉・張春梅 2010 『《松文清公陞官録》補注』 河南大学出版社.